

テクノロジーの乱用

中邑賢龍

タブレットや視線入力装置を用いて会話している子ども達を学校で見かける。しかし、その中には、子どもの意思ではなく、教師や親の意思で会話が成立しているかのように見える事例を散見する。

テクノロジーは障害のある子どもの随意運動も不随意運動も全て電気信号に変換し、子どもの動きを様々な形に変えて見せてくれる。

タブレットは触れば画面や音の変化を生む。スキャン入力と組み合わせればスイッチ操作が偶然の動きによるものであっても、それがまるで子どもの意思のようにスクリーンにメッセージを示し、音声を発して見せる。

それは視線入力装置を使っても同じである。コミュニケーションが難しかった子どもが言葉を自由に操る様子を目の当たりにした人たちの中には、それが虚構であったとしても、テクノロジーを魔法の道具と信じる人も出てくる。

子どもの喃語やわずかな動きに意味付けをして会話することが子どもの発達を促すことは間違いない。

しかし因果関係理解の不十分な重度障害のある子どもの場合、それは彼らの意思表出に結びつきにくい。

それどころか周囲の人の意思に会話操られる危険性もある。彼らの意思でなくてもタブレットが音声を発したからと言って、彼らの意思に反することが行われることになる。

子どもの可能性を信じることは重要である。

しかし、あまりにも飛躍した可能性を信じる時、我々の心の中には時に間違った力が生じる。テクノロジーを導入したからと言って子どもの意思が生まれるわけではない。

何をしたいかといった意思の表出にはそれまでの様々な自己決定の経験や認知発達が必要である。テクノロジーの意図的操作は、運動能力以外にも様々な力が育ってなければ難しい。専門家であるがゆえに我々は子どもの能力を冷静に総合的に見つめる必要がある。